第20号
平成26年11月6日

農業大学校だより

vol.20

農大改革特集号

実践経営者コースの新しい授業が始まる

農業大学校で新しく誕生した実践経営者コースの授業が始まっています。例えば、国際文化論のカチョフ・シエロ・エリス先生の講義は、みな英語です。東洋の文化と西洋の文化の違いを実体験もふまえてネーティブの発音で説明して、問いかける。どの学生も真剣な面持ちで講義に集中しています。

日本一の農大を目指して

農業大学校校長
町田　秀俊

「農大改革」。この言葉に込められた期待の大きさを改めて感じつつ、年度の後半を迎えました。先駆的な取組である「実践経営者コース」では、一期生七名の卒業後の就農計画がおぼろげながら見えてきました。来年四月からは、一年後の就農を目指し模擬経営が始まります。

既存コース一年三十四名は、四五日間に延長された現地体験実習を無事終え、皆笑顔でひと回り大きくなって帰ってきました。二年生は、今年から経営収支管理まで求められる「プロジェクト学習」に取り組んでいます。

昨年度から二か年で行っている両キャンパスでの学習環境の整備も急ピッチで進められています。松代では全室個室一〇〇名収容の新学生寮が、いよいよその姿を現してきました。小諸では旧清風寮が新規就農研修者用宿舎として生まれ変わります。

「長野県農業をけん引する農業者の育成」という農大の使命をいかに果たしていくか。四月以降、改革に向けた様々な取組を手探りで進めてきました。「改革」はまだ始まったばかりですが、当然のことながら、「主役は学生であること」。このことを肝に銘じ、全国から模範とされるような日本一の農大を目指し、一歩一歩着実に取り組んでまいります。

発行／長野県農業大学校　長野市松代町大室3700

農大特別公開講座

七月九日、長野市内のメルパルク長野において、農業大学校の客員教授、NPO法人産学連携推進機構の妹尾堅一郎氏による「次世代の農林水産業イノベーションを考える」と題する特別公開講座を開催しました。一般公開講座として、多くの県民の方にもご参加いただきましたが「今の小学生が大人になる頃には職業の三分の二は入れ替わっている」という身近な話題から掘り下げたイノベーション理論の奥深さに多くの学生は魅了されていました。十一月二十八日には、新日本有限責任監査法人の大久保和孝CSR推進部長と山梨県サラダボウルの田中進社長による公開講座第二弾を予定しています。

就農の夢の実現に向け、農業機械のプロが手ほどき！

五月二十二日、総合農学科の1学年生四十一名を対象に、「長野県農業を担う人材の育成支援協定」に基づく初めての授業が行われました。この協定は、最新の農業機械の操作技術やメンテナンスの技能の習得を進めるため、三月十七日に農業大学校と大手農業機械メーカーが交わしたものです。

第二回目は協定メーカーの一社である株式会社ヰセキ信越長野支社の技術者から、トラクタの安全操作や保守点検等の講義を受けた後、トラクタの運転に挑戦しました。まだ、車の運転にも不慣れな学生が多い中、メーカーの方に同乗してもらってスピードをあげて走れるまでになり、大型特殊免許（農耕車限定）の取得に向けて一歩が進められました。

八月二十五日には、第二弾として、同じく総合農学科一年生三十四名が、東日本三菱農機販売株式会社長野支店に出向いて、最新のトラクタやコンバイン等の機械の知識を習得しました。新たな試みだけに、今回もマスコミの取材があり、記者から取材を受けた学生は「農家出身ではないので、今回の体験は大変参考になりました」「若者の就農者が少ない中、私たちが頑張らねば」等、頼もしい発言をしていました。

農業法人合同説明会を開催

実家が農家で後継ぎとして就農する学生の他、最近では、非農家であっても、農事組合法人や会社等に就職する形での就農を希望する学生もいます。そこで、こうした学生の就農希望を満たすため、七月七日に「農業法人等合同説明会」を開催しました。

県を代表する五の法人や大規模農家から数分間ずつのプレゼンテーションを聞いた後に、学生たちは関心を持つ法人等のブースを訪れて個別面談を行いました。

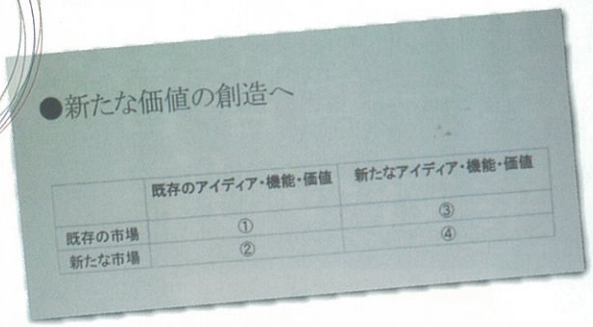
農業大学校を卒業したばかりの先輩がスタッフとして説明してくれた法人もあり、学生たちは身近さを感じたのか、和やかなムードの中で意見を交換しあっていました。こうした説明会が学生と法人双方の橋渡しを行ないました。

最先端の経営者の実践を聴く

六月三十日、安曇野市の浅川拓郎さんの「安曇野の田園風景を守りたい」と題する第一回就農率向上特別セミナーを行いました。浅川さんは、モンドセレクションを受賞したお米を中心に小麦、メロン、イチゴ等、幅広く多様な経営を行っている先進的な農家ですが、メロンに魅せられて後継者となり、農業のPRになるかもしれないとNHKの「のど自慢」に出演したといった等身大の話題に学生たちはおおいに親近感を抱いていました。

第2回目は十月一七日に、大町市で果樹経営を営む小澤浩太氏から「北アルプスからの恵みを真心を込めて」と題して、経営の視点を取り入れる重要性から、実践と理論の両輪からなるレクチャーをいただきました。リンゴの高密度栽培技術や消費者ニーズの視点から何を作るのかを決める。そして、イタリア留学が契機となり、文化的にもかっこいい農業を実現したいという夢を大いに語っていただきました。

新たなアイディアで
新しい市場を
開拓するのは
大変ですが
やりがいがあります



四県体育大会で活躍

十月一五日、埼玉県において、新潟県、群馬県、埼玉県との恒例の親善スポーツ大会が開催されました。野球は三対一で勝利し、四年連続の優勝を飾りました。また、バレーボールも二年連続で準優勝を果たしました。親善大会に参加しない学生は根子岳に登山をし、台風一過の秋空を満喫しました。

千曲川マルシュに参加しました

九月二十八日、千曲市の戸倉体育館で開催された「第三回千曲川流域ブランドフェア」～千曲川マルシェ～に農大も出展し、今が旬のぶどう、りんご、なしや、かぼちゃ、じゃがいも等の野菜、花束、小麦粉など、学生たちが丹精こめて栽培した農産物を販売しました。ですが、これは単なる販売ではなく「農産物マーケティング論実習」という授業の一環です。二年生たちは、販売を通じ売れ筋のアイテムを把握したり、他ブースを回って、出展社の販売方法の工夫等を調査し、レポートを提出しました。

「試食効果はやはり絶大」「わかりやすいポップデザインや『ゆるキャラ』によるPRが大切」「お客様への声かけなどもポイント」と販売の実情を大いに勉強しました。

実践経営者コースの学生に想いを聞いてみました

越　晋之

実家がぶどう農家なのでいつかは後を継ぐと思っていて、18年の社会人経験をしたうえでの入学です。いきなり後を継ぐよりは経営のベースを学べますし、70aの経営を最低でも1ha以上に拡大したいと思っています。野菜と果樹がバランスよく学べるのが魅力です。野菜はまったくやったことがなかったのですが、野菜も経営に取り入れていきたいと思っています。

網倉圭助

アスパラガスを栽培したくて入学しました。将来もアスパラガスを生産していくつもりです。地元の農家のところに研修に行っているのですが、学校の環境ともまた違います。地元とのつながりがあるのでとても助かっています。

髙野　哲

家が近くで研修先も農協等、学校に近い。卒業した後もつきあいを続けられるのが有意義だと思っています。入学前はぶどう一本を考えていたのですが、実際にぶどう農家に研修にいって厳しい現状も目にして、野菜も視野に入れて広い目で経営を展開していきたいと思っています。

小松知生

社会人体験がまだないので、一生懸命な同級生の姿にあせるところもありますが、刺激になっています。将来は地元駒ヶ根で祖父母の農業を継ぎたいと思っています。ただ現状を維持するよりも、こんにゃくの加工販売を含め、6次産業化や他品目を導入して規模拡大したいので、色々な知識を身に付けていきたいです。

三村雅俊

東京の会社を辞め実家の後を継ごうと入学しました。実際に入学し、仲間と切磋琢磨したり、様々な農業法人の経営を見る中で自分が抱いていた農家のイメージが甘かったなと思っています。入学前はただ大規模化して稼ぎたいなと思っていたのですが、今はそれにプラスしてカッコ悪いという農業のイメージを変えられるような経営をやりたい。目標がなかった頃の大学の授業とは違って一日、一日が楽しいし充実していますね。

佐伯幸平

農業について基本的な知識が十分にないので、基礎からきちんと学べる講義にはとても満足しています。将来は地域にあった品目を生産しつつ、独立して自分で経営を動かしていきたい。自分がやりたいことをやれるのは面白いと思います。

徳田成秀

もともと動物や自然環境保護の会社やNPOで働いていて、東京人からすると長野にいいイメージがあり、入学しました。Iターンする人間として、地域に入っていくため、人間力が身に付く、コミュニケーション論や地域社会論はすごく参考になっています。学校の授業や法人での経験で夢が持てました。早く自立して、就農予定の安曇野の良さを前面に出し、イチゴを始め観光農園を目指し、地域に力を加えたいと思っています。